

成任編刊『太平広記詳節』について

溝部良恵

一 『太平広記詳節』とは

『太平広記詳節』は、朝鮮世宗期から成宗期にかけての官僚であり、文人としても有名な成任が、中国北宋はじめに編纂された類書『太平広記』五百巻を五十巻に抄録し、一四六二年（朝鮮世祖七年）に刊行した書物である。周知の通り『太平広記』は、先秦から宋初までの稗史、小説を集めた類書である。北宋初の国家事業として、九七七年（太平興国二年）太宗の命をうけ、李昉等が編纂したが、学者によりその内容が急ぐところではないとして、版木のまま宮中の太清楼に所蔵されたといわれる。しかし宋代には、蘇東坡をはじめとする文人が『太平広記』の内容に関していくつかの記述を残している。⁽¹⁾ また南宋から元明清の小説戯曲には、『太平広記』の題材をもとに翻案した作品が少なからずあり、この書が人々の目に触れるものとなっていたことが知られる。しかし残念ながら現在宋本の原本は伝わっておらず、我々が目にすることができる最も早いまとまった『太平広記』は、明の談愷が写本をもとに、校訂を加えて、一五六六年（嘉靖四十五年）に刊行した所謂「談刻本」である。⁽²⁾ 談刻本は現存する『太平広記』の中で、最も基本的な版本とされ、現在排印本としては最も信頼されている中華書局本（もとは一九五九年人民文学出版社刊。一九六一年訂正の後中華書局より出版。）においても、底本とされている。成任の『太平広記詳節』は、この談刻本

よりも百年ほど早い出版であり、成任が見た『太平広記』は恐らく南宋のものであったと推測される。このように『太平広記詳節』は大変貴重な書物であるが、これまで日本・中国ではほとんどその存在が知られていなかった。⁽³⁾筆者はこのたび幸いにも韓国において、この『太平広記詳節』を調査する機会を得た。⁽⁴⁾以下その成果について報告したい。

二. 編者成任について

成任は、字は重卿、号は眞逸齋という。⁽⁵⁾昌寧の成念祖を父とし、海州牧使安從約の娘を母として、一四二一年(世宗三年)に生まれ、一四八四年(成宗十五年)世を去った。高麗の武將李成桂が王位を篡奪し、国号を朝鮮とし、漢陽(現ソウル)を都に定めたのは、一三九二年のことであり、成任が生きた時代は朝鮮王朝の草創期にあたる。成任の母親は高麗の名臣を祖先とする名門の出であり、成家は勲旧派(世祖の王位篡奪の際手柄をたて、建国後は歴代諸王を補佐し、李朝の基礎を築いた官学派のこと)に属する家柄であった。成任は四代世宗期の初めに生まれ、一四四七年(世宗十九年)に擢第し、承文院(外交文書を作成する役所)を皮切りに、順調に官位を進め、吏曹の判書など数多くの要職を歴任した。世宗はハングル(訓民正音)を創製するなど、李氏朝鮮の中で最も傑出した英名君主であったといわれる。世宗は若手文官を選抜して、集賢殿において学問研究を行わせた。それによって集賢殿には世宗のブレイン集団ともいべき李朝草創期の文壇を支えた優秀な人材が多く集まり、新羅から李朝初期の漢文学のアンソロジーである『東文選』を編纂した徐居正(一四二〇—一四八八年)などを輩出した。⁽⁶⁾成任も一四五〇年(世宗三十二年)に集賢殿に入っている。詩文に秀で、とりわけ律詩を善くしたという。文集『安齋集』、『太平広記詳節』(後に詳述するが、『太平広記詳節』はまさに成任が集賢殿にいた時に編まれたものであった。)、さらに自ら『太平広記』に倣って、古今の異聞をまとめた『太平通載』⁽⁷⁾を著した。成任には成侃(一四二七—一四五六年、字和仲)、成侃(一四三九—一五〇四年、字肇叔)という二人の弟がいた。成侃は一四五三年(瑞宗元年)に科擧に擢第し、文名をさせたものの、数えの三十で

若くして亡くなってしまった。また末弟成侃も、一四六二年（世祖七年）に擢第し承文院に入り、数々の要職を歴任した。三兄弟の中で文名は最も高く、李朝初期において徐居正に次ぐ漢文学者と評価されている。文集『虚白堂集』、『慵齋叢話』などがあるほか、李朝の樂制の準則をまとめた『樂学軌範』を撰したことでも知られる。『慵齋叢話』は、李朝に發達した稗官小説（中国の筆記小説のようなもの）とよばれるジャンルの嚆矢ともいえる書物で、内容は「士大夫間の交友から宮中や民間の風俗、あるいは巷の奇譚・笑話に至るまで」多種多様であり、「成侃の生彩に富む描写は、李朝初期の社会・文化の実情を知るのにこの上ない良き資料⁽⁸⁾」であると高く評価されている。

三 『太平広記詳節』の概要

まず最初に『太平広記』自体がいつ頃朝鮮に流伝したのかについて触れておきたい。⁽⁹⁾朝鮮にいつ『太平広記』が伝わったのか、年代を確定できる資料は見つかっていない。現在のところ最も早く『太平広記』の名が見える文献として知られるのは、高麗高宗の時代（一二一四—一二五九年）に翰林院の文人達によって作られた歌謡「翰林別曲」である。「翰林別曲」とは科擧に合格した文人達が、自分達の親しんだ書体や酒、庭園の情景など日常の生活や文化を詠み、集団で作った歌謡であるといわれている。全八聯からなり『太平広記』の名が見えるのは第二聯で以下の通りである。

唐漢書、莊老子、韓柳文集、李杜集、蘭台集、白樂天集、毛詩尚書、周易春秋

周戴礼記云云、太平広記四百余卷、太平広記四百余卷、偉歴覽景何如。

（『高麗史』卷七十一 志卷第二十五 樂二）

『莊子』『老子』李杜の詩集など文人達が注まで暗誦したという経書や詩とともに『太平広記』があげられている。⁽¹⁰⁾

このように十三世紀前半には、『太平広記』は高麗の文人達にとつて経書とならぶ素養の一つとみなされるほど流伝していたことがわかる。⁽¹¹⁾

李朝においても、『朝鮮王朝実録』などに頻繁に『太平広記』の名が見られ、引き続き文人達の間で『太平広記』がよく読まれていたと考えられる。こうした中で成任によつて行われた『太平広記』の抄録、刊行は、本来五百巻という大部の書物を読者にとつてより身近な存在にしたことは間違いないだろう。『太平広記詳節』は重版されるほど文人の間に広まり、⁽¹²⁾ またその後李朝宣祖から景宗にかけての時代（一五六七—一七二四年）に『太平広記』の中からいくつかの話に諺解（ハングル語訳）⁽¹³⁾ を施した『太平広記諺解』という翻訳書が刊行されるほどであった。⁽¹⁴⁾ 当時漢文学とは、教育を受けた一部の文人やその子弟達のものであったので、こうしてハングルに翻訳されることによつて、さらに読者層を広げつていったものと思われる。⁽¹⁵⁾

以下『太平広記詳節』の内容について触れてみたい。

弟成俔の著した『慵齋叢話』⁽¹⁶⁾ 巻十には『太平広記詳節』に関して、以下のような記述がある。

伯氏文安公好学忘倦、嘗在集賢殿、抄録『太平広記』五百巻、約為『太平広記詳節』五十巻、刊行於世、又聚諸書及『広記詳節』、為『太平通載』八十巻

文安公（成任の諡）は学問を好み、倦むことを忘れる人だった。かつて集賢殿にいたとき、『太平広記』五百巻を抄録し、縮めて『太平広記詳節』五十巻として、世に刊行した。また諸本や『太平広記詳節』を集めて、『太平通載』八十巻を作った。

このように『太平広記詳節』は『太平広記』原五百巻から、成任が選り、五十巻にまとめたものであったことがわかる。具体的な刊行年代については、徐居正による「太平広記詳節序」（『四佳文集』所収）に、「蒼龍壬午夏四月有日達城徐居正剛仲書于四佳亭之讀書軒」という記述があることから、世祖七年（一四六二年）頃であったと推測できる。それでは成任は『太平広記』からどのような話を選び、五十巻としたのだろうか。残念ながら現在のところ『太平広記詳節』の完本は発見されておらず、いくつかの残本が韓国国内に散在している。目録調査によって今回確かめられた『太平広記詳節』に関する情報は以下のとおりである。

	現所蔵	所蔵巻数	目録	備考
1	国立中央図書館	巻14、巻19：1冊	『韓国古書総合目録』	
2	高麗大学（晩松文庫）	巻8、巻11、巻39、巻42：2冊	『高麗大学校貴重書目録』（晩松文庫）	
3	誠庵文庫 ^①	巻15、巻21：2冊	『韓国典籍総合目録第四巻・誠庵文庫目録』	未見。
4	清芬室	巻19、巻23、巻25、巻27 零本8巻	『清芬室目録』	未見。
5	忠南大	2巻1冊？ 3巻3冊？	『忠南大学校古書目録』	未見。
6	柳海暉	記載無し	『韓国古書総合目録』	未見
7	（前問恭作）	記載無し	『古鮮冊譜』	未見

今回の調査で、筆者は国立中央図書館及び高麗大学校所蔵の『太平広記詳節』について、前者はマイクロフィルム、

後者については原本を見ることができた。誠庵文庫は、個人蔵書家趙炳舜氏の収集した本を収めた個人文庫であり、ソウル市の中心部にあるが（誠庵古書博物館として、朝鮮活字本の資料は一部一般公開されている）、今回は趙氏の同意を得ることができず、同文庫所蔵の『太平広記詳節』については、残念ながら閲覧することができなかった。清芬室は、やはり個人蔵書家である李仁榮氏の文庫であるが、李仁榮氏はすでに亡くなっており、その後蔵書はどのようなになっているのか現在では不明であるという。忠南大本については、忠南大がソウル市近郊の大田市にあるため、今回は時間的な制約から実際に見ることができなかった。忠南大本の目録記述は以下の通り三種ある。

①『韓国古書総合目録』〔忠南大（三冊）〕

②『忠南大学校古書目録』貴重書（集二二五）

李昉（宋）奉勅撰 木版本 世祖8（一四六二）序 2巻1冊 四周単邊，半郭23×16 cm，有界。半葉10行17字，内向黒魚尾。30.7×19.9 cm。綿装。

表題：太平廣記

序：蒼龍壬午（一四六二）夏四月有日達城徐居正（一四二〇～一四八八）剛中書于四佳享之読書軒易城李胤侯序。
紙質：楮紙

③『忠南大学校古書目録』貴重書（集二二五）

李昉（宋）奉勅撰 木版本（成宗年間（一四七〇～一四九五））刊

3巻3冊（卷一～三）。四周単邊，半郭23.2×15.9 cm，有界。半葉10行17字，註單行。内向黒魚尾。33.5×20.5 cm。綿装。

板心題：廣記

②と③については、同一目録の中に相前後して載せられており、おそらく整理番号を示すと思われる、「集一二五二」という番号が同じであることから、同一書を誤って二度載せたものかとも思われる。しかし記載された書誌情報に異同があり、とりわけ②は「2巻1冊」、③は「3巻3冊」となっており、この本が同一本でない可能性も捨てきれない。また国立中央図書館本、高麗大本、誠庵文庫本については、板心が「廣記詳節」とされているが、忠南大目録は「廣記」としている。こうした点については、今後さらに調査を進める必要がある。

上記表6にある柳海曄氏所蔵本については、『韓国古書総合目録』には所蔵者以外の情報、柳氏の所蔵する『太平広記詳節』の内容については記録されていない。⁽¹⁸⁾

上記表7『古鮮冊譜』は、明治期朝鮮公使館の通訳官をしていた前間恭作氏が、調査しあるいは収集した朝鮮本について備忘録的に控えていた記録をまとめたものである。前間氏の収集した朝鮮本は、大正十三年と昭和十六年の二度にわたって、東洋文庫に寄贈され、現在ではその目録は『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』（一九七九年）として公開されているが、その中には『太平広記詳節』は含まれていない。『古鮮冊譜』「序」によれば、前間氏が見た朝鮮本は李朝の宮廷文庫であつた奎章閣の旧蔵書をはじめとして、南満州鉄道会社調査部収集本、その他浅見倫太郎氏所蔵本など、多くの機関、個人蔵書家所蔵本であつた。前間氏はこうした調査で見た本について、得られた限りの書誌情報を加えている。しかし『太平広記詳節』については、先に引用した成俔『慵齋叢話』巻十の記述が書写されているのみである。残念ながら前間氏が『太平広記詳節』を閲覧した経緯、同書の状態などについては記述されていない。

以上のように現在韓国で見ることのできる『太平広記詳節』は原本に比してわずかな一部分であるが、幸いなことに忠南大本には目録が残されており、これによって現在我々は成任が『太平広記』の中からの話を選び、収録したのかを知ることができる。前述したように筆者は今回忠南大本を見ることはできなかったが、李来宗氏の博士論文「鮮初 筆記의 展開 様相에 관한 研究」⁽¹⁹⁾ 附録「『太平広記詳節』矯正目録」を入手することができた。⁽²⁰⁾ 紙数の都合上

全ての篇名をあげることができないが、以下に全体の分類構成をあげるとともに、本稿末に、国立中央図書館本及び高麗大所蔵本の篇名目録を附しておきたい。

『太平広記詳節』目録上（巻一～巻三五）下（巻二六～巻五十）（括弧内の数字は収録された話の数）

卷一 神仙一（5）	卷十八 酒（7）交友（3）奢侈（9）詭詐（10）	卷三五 木花（2）菓（8）香菓（1）服餌（3） 木怪（5）花卉怪（2）菓怪（1）
卷二 神仙二（9）	卷十九 諂佞（11）謬誤（4）遺忘（1）治生（2）	卷三六 龍（8）蛟（1）
卷三 神仙三（9）	卷二十 貪（3）褊急（5）詭譎（22）嘲諷（7）	卷三七 虎（13）
卷四 神仙四（8）	卷二一 嗤鄙（38）無賴（4）	卷三八 牛（3）馬（4）犬（9）豕（2）鼠（3） 鼠狼（1）
卷五 神仙五（7）	卷二二 輕薄（7）酷暴（11）烈女（5）賢婦（3） 才婦（7）	卷三九 獅子（1）象（2）雜獸（1）狼（2）熊（1） 狸（2）麋（3）猿（1）（4）
卷六 女仙一（9）	卷二三 美婦（1）妬婦（6）妓女（5）情感（7）	卷四十 猿二（2）猩猩（2）狐一（5）
卷七 女仙二（2）道術（2） 方士（3）異人（3）	卷二四 童僕（5）夢（16）夢鬼神（3）	卷四一 狐二（7）
卷八 異人二（2）異僧（4） 釋證（1）報應一（6）	卷二五 夢遊（4）巫（2）幻術（7）	卷四二 蛇（13）鶴（1）鸚鵡（1）鷹（2）鵠（1） 孔雀（1）燕（1）鷓鴣（1）鵲（4）鷄（3） 鴈（1）雀（2）烏（1）雜禽（5）
卷九 報應二（7）徵應一（4）	卷二六 妖妄（3）神一（10）	卷四三 水族（17）昆蟲一（9）
卷十 徵應二（17）定數一（8）	卷二七 神二（8）	卷四四 昆蟲二（15）
卷十一 定數二（12）	卷二八 神三（5）淫祠（3）	卷四五 蠻族（21）雜傳一（1）

卷十二 感應(5) 讖應(1) 名賢(1) 諷諫(3) 廉儉(1) 吝嗇(6) 氣義(3) 知人(5) 精察(6)	卷二十九 鬼一(17)	卷四六 雜傳二(3)
卷十三 俊辯(7) 幼敏(4) 器量(3) 貢舉(3) 職官(2) 權倖(2) 將帥(2) 雜譎智(1) 驍勇(3)	卷三十 鬼二(6)	卷四七 雜傳三(3)
卷十四 豪俠(10) 卷十五 博物(1) 文章(10) 武臣有文(3) 好尚(3) 高逸(1) 樂(6)	卷三一 鬼三(11) 卷三二 夜叉(5) 神魂(3) 妖怪(8)	卷四八 雜傳四(4) 卷四九 雜錄一(25)
卷十六 書(3) 畫(3) 算術(1) 卜筮(3) 醫(4) 異疾(3) 相(2) 伎巧(2)	卷三三 精怪(6) 凶器(1) 火(1) 靈異(4) 再生(6)	卷五十 雜錄二(21)
卷十七 絶藝(2) 博戲(2) 器玩(5)	卷三四 塚墓(2) 銘記(1) 雷(3) 雨(1) 石(1) 坡沙(1) 水(2) 寶(12) 奇物(4) 異木(1) 草(2)	

全体を通してみると、『太平広記詳節』は『太平広記』に忠実に編集されているといえる。成任の分類はほとんど

『太平広記』に拠るもので、また全五百巻から偏ることなく合計八百三十六篇の話が選択されている。しかしそれは単に漫然と『太平広記』をダイジェストしたものであるということではない。「崑崙奴」「聶隱娘」「淳于棼」「任氏傳」「李娃傳」「霍小玉傳」「謝小娥傳」など、現在もし唐代小説のアンソロジーが作られるとしたら、必ず収録されるであろう代表的な作品をもらすことなく収めており、成任が確かな選択眼を持っていたことがわかる。『太平広記詳節』が多く読者に受け入れられたのは、それぞれの話自身が持つ面白さによることはもちろんのこと、成任の編集の力に負うところも大きいだろう。また実は徐居正の「詳節太平広記序」によると、『太平広記』に興味を持っていたのは、成任だけではなく、夭折した弟成侃も「一日在集賢殿、亡友昌寧成和仲（＝成侃）讀之（＝『太平広記』）、終日屹不知倦」と記されるほどであった。続いて徐居正は成侃と小説についてかわした議論を記した後、成任が『太平広記詳節』を刊行した経緯を述べ、「重卿（＝成任）之志則和仲之志」と述べている。この「序」を見る限りでは、『太平広記詳節』が刊行された背景には、成任のみならず成侃の影響もあったように見うけられる。『慵齋叢話』には、夭折した成侃の死をめぐって、成侃自らが卜筮によつて自らの死期を予言していた話（巻二）や成侃の三人自心子の弓二人が相次いで三十前には亡くなり、残りの一人も精神を病んで治癒することはなかったという話（巻四）を記している。⁽²⁾成侃は老荘思想にも興味を持っていたようで、こうした成家兄弟の不思議な話、小説的な話への志向が相互に影響を及ぼし合い、『太平広記詳節』『太平通載』『慵齋叢話』の編纂・執筆が行われていったものと思われる。

四、『太平広記詳節』の文獻的価値

前述したように『太平広記詳節』は、談刻本よりも百年ほど早く出版されており、成任は南宋で出版された『太平広記』を原本としたのではないかと思われる。また成任の編集態度は『太平広記』に忠実なものであり、『太平広記詳節』は信頼に足るテキストであるといえるだろう。では『太平広記詳節』は現存する『太平広記』に対して、どの

ような文献的な価値を有するのだろうか。

まず最初に『太平広記』のテキストに関する問題を簡単に整理しておきたい。
現存する主要な『太平広記』のテキストは以下の通りである。

- ① 談愷本 (明嘉靖四十五年・一五六六年) 中華書局本底本
- ② 野竹齋抄本 (明の陳与文が所蔵していた鈔本・現中国国家図書館蔵)
- ③ 許自昌刻本 (明の許自昌が明末に刊行)
- ④ 黃氏巾箱本 (清乾隆二十年・一七五五年に黃晟が刊行)
- ⑤ 四庫全書本 (清)
- ⑥ 陳氏校本 (清の陳鱣が発見した宋本によって許自昌刻本を校訂・現中国国家図書館蔵)
- ⑦ 孫氏校本 (清の孫潛が発見した宋本によって談愷本を校訂・現台湾大学蔵)

以上のように現在では『太平広記』の宋の原本は残されていない。そもそも周知のとおり宋代において、『太平広記』の版本は宮中の秘書に保存され、すぐには印刷されなかったといわれる。しかしいくつかの記述から宋代には写本の形で、一般にも流出していたものと思われ、談愷はそのような写本の一つを手に入れ、嘉靖四十五年印刷刊行した。これが所謂談刻本である。しかしこの際談愷は全てのテキストをそろえることができないままに初版本を刊行した。巻二六五、巻二七〇巻首にそれぞれ談愷による識語があり、その経緯が説明されている。⁽²²⁾それによると談愷が手に入れた写本には七巻の欠本があり、初版の時点では逸文を全て集めることができず、談刻本は版を重ねることに改訂を行った。その結果談刻本には異同のある数種の版本が存在することとなった。中華書局本「點校説明」によれば、中華書局本は三種の版本を確認し、初印本、後印本、最後印本としている。⁽²³⁾さらに張国風氏は北京図書館(現・国家図書館)で新たに第四の談刻本を発見したことを報告している。張国風氏はこれら数種の談刻本のほかに、陳氏校本、

孫氏校本、野竹齋抄本を丹念に比較しながら、宋本の「原貌」にせまってきた。そして諸本には個々の文字の異同がある他に、

①談刻本、野竹齋抄本の卷一四一は、陳氏校本、孫氏校本の卷一四二を二分し、卷一四一、一四二にあてたもので、南宋の時点ですでに卷一四一は失われていた可能性が高い（卷一四一については、陳氏校本、孫氏校本とも目錄、本文とも失われている）。

②陳校本の卷一五〇の八篇中四篇が目錄はあるが、本文は失われている（所謂「有目無篇」）。野竹齋抄本は陳校本の卷一四八を二分割し、卷一四八、一四九とし、卷一四九の大半を卷一五〇にあてている。

③各本の異同は卷二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六九、二七〇の七巻に集中し、数種の談刻本における相違もこの七巻に集中している。

④各話の出典に異同がある。

などの相違があることを指摘している。談刻本、陳氏校本や孫氏校本、野竹齋抄本はそれぞれ貴重な資料ではあるが、各本の間にも様々な相違があり、各本が拠った宋鈔本自身が同一のものでなかったと考えられ、このことが現在宋本『太平広記』の「原貌」を探索していくうえで、問題をさらに複雑化していると思われる。こうした中で宋本の一部を伝える『太平広記詳節』は非常に貴重な版本であるといえる。上に挙げた問題に対していくつか具体的な例をあげてみたい。

高麗大所蔵本より以下のことがわかる。

①『太平広記詳節』卷十「蕃中六蕃」「耶孤児」「胡王」（全て出典は『玉堂閑話』）は現存の『太平広記』各種版本には見られない話である。前後は卷一四〇の話「汪鳳」と、卷一四三の話「徐慶」に挟まれており、成任が全体を通じて『太平広記』原本に忠実に抄録していることから鑑みて、この三篇は本来卷一四一を構成していた話の一部で

ある可能性が大きい。

②『太平広記詳節』巻十「王陟」（出『統定命録』）は、陳氏校本、孫氏校本各巻一五一において所謂「有目無篇」、本文の失われている話である。

以下は忠南大本の目録より判断されることである。

③『太平広記詳節』巻二一「李文禮」、巻二六「陽雍」は、現存『太平広記』の各版本には、目録、本文とも見当たらない。逸文の可能性がある。

④『太平広記詳節』巻二二「侯沐」⁽²⁴⁾は陳氏校本、孫氏校本、野竹斎抄本では巻二六六にある「有目無篇」の一つである。

⑤『太平広記詳節』巻二二「陳延美」は、談刻本数種の中で収録されている場合と闕文となっている場合のあるものである。⁽²⁵⁾

⑥『太平広記詳節』巻三一「顔潛」は、談刻本では「有目無篇」であるが、中華書局本は、野竹斎抄本によって補っているものである。

このほか『太平広記詳節』巻二一から巻二二には、『太平広記』の現存する各版本の中で最も相違の多い巻二六五から巻二七〇の本文が多数含まれている。しかし巻二一、巻二二はそれぞれ誠庵文庫本、清芬室本であるため、上記のような経緯で、残念ながら閲覧することはできない。

また各話における出典の異同については、二つの方向からの問題が存在する。一つはこれまで指摘してきたように、『太平広記』各種版本間における異同であり、もう一つは個々の小説集の原本や逸文と『太平広記』の示す出典の違いである。『太平広記』の本文、あるいは出典の記載が『太平御覧』などに比較して、粗雑な印象を免れ得ないこと

は、すでに指摘されていることであり、『太平広記』が宋初に編纂されたときから持つ問題である。現在では李劍国氏の『唐五代志怪传奇叙録』（南開大学出版社・一九九三年）によつて、『太平広記』以外にも多くの類書・文献から逸文が集められ、整理、比較検討がすすみ、唐代小説のテキスト問題解決に多くの手がかりが与えられるようになったが、尚検討を要する問題が存している。『太平広記詳節』はこうした問題に対しても、また一つの新しい資料となる得るものと思われる。一例をあげておきたい。

『太平広記』巻四四五所収の「張鉞」は談刻本では中唐初期の小説集『広異記』（戴孚撰）が出典とされ、他の『太平広記』の版本においてもとくには異同はなく、中華書局本による『広異記』の排印本にも収められている。⁽²⁶⁾しかし一方『紺珠集』（宋・朱勝非編）、『錦繡萬花谷』（宋・撰人不詳）などの類書では、晚唐張翬撰の『宣室志』が出典として記されている。内容は張が旅の途中に巴西侯という人に立派な屋敷に招かれ、豪華なもてなしを受けるが、一夜明けてみると巴西侯は実は猿であつた、という『東陽夜怪録』（撰人不詳）に似た話である。李劍国氏は前掲書において、以上の資料をあげた上で、決定的な決め手はないが、話の風格からみて、「張鉞」は『広異記』よりも『宣室志』の話としたほうがふさわしいと判断している。李劍国氏はまた『太平広記』中の「張鉞」の前後に『広異記』を出典とする話が多く収録されているために、『太平広記』編者が誤つたのではないかと推測している。しかし『太平広記詳節』巻三九では、「張鉞」の出典は『宣室志』となっており、「張鉞」は本来『太平広記』においても、『宣室志』を出典としていた可能性が高いと考えられる。

このように『太平広記詳節』は『太平広記』の原貌を探求する上で、あるいは個々の六朝、唐代小説研究をする上で、大変貴重な資料を提供してくれるものである。今後『太平広記詳節』の未発見部分が少しでも多く発見され、六朝、唐代小説研究に活用されることが強く望まれる。

注

- (1) 『東坡題跋』巻三に「『太平広記』中、有人為鬼物所引入墟墓、皆華屋洞戸。(以下略)」とあり、これは『太平広記』巻三三九「崔書生」に見られる。
- (2) 『太平広記』の諸本については、富永一登「『太平広記』の諸本について」(『広島大学文学部紀要』第59巻)に詳しい。
- (3) 台湾の王国良氏は『六朝志怪小説考論』(文史哲出版社 民国七七年)において、朝鮮世祖七年(一四六二年)成任が抄録し、刊行した『太平広記詳節』五十巻という書物が韓国に存在すること、またこの刊行年間からして成任が抄録した『太平広記』は南宋の版本である可能性があることなどを指摘している。
- (4) 調査の経緯などについては、本稿末の「附記」を参照。
- (5) 成任の生涯については、『成宗実録』巻一六九に拠った。
- (6) 朝鮮時代の歴史的背景、文学史的事項については、朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史(新版)』(三省堂・一九九五年)、金思煒・趙演鉉『朝鮮文学史』(北望社・昭和四十六年)、金東旭『朝鮮文学史』(NHK出版・一九七四年)の該当部分を適宜参考にした。
- (7) 『太平通載』の中にも、『太平広記』の資料が一部見られる。『太平通載』も韓国各地に散在しているが、今回は詳しく調査する時間がなかった。今回筆者が韓国で文献調査をするきっかけを作ってくださった張国風中国人民大学教授(詳しい経緯については文末の「附記」を参照)にご教示いただいたところでは、筆者がこれまで注目してきた唐代小説、戴孚撰『広異記』について、高麗大所蔵の『太平通載』のなかに「徐福」の一篇が収録されているという。
- (8) 野崎充彦「『備齋叢話』——十五世紀朝鮮士大夫の視野と語りについて——」(『人文研究』四六号、一九九四年)。以下『備齋叢話』あるいは成任、侃については全般に野崎氏の論考を参考にさせていただいた。
- (9) 以下韓国における『太平広記』の流伝については、徐張源「『太平広記』東傳之始末及其影響」(『中国語文学』第7輯)、閔寛東「中国古典小説在韓国之伝播」(学林出版・一九九八年)、閔寛東「中国古典小説資料叢考・韓国篇」(아세아문화사・二〇〇一年)の該当箇所を適宜参考にした。また日本における『太平広記』の流伝については、周以量「日本における『太平広記』の流布と受容——近世以前の資料を中心に——」(『和漢比較文学』第二十六号)の論文がある。
- (10) ここでは『太平広記』四百巻とされている。韋旭昇著・豊福健二監修・柴田清繼・野崎充彦訳『朝鮮における中国文学』(研文出版社・一九九九年)訳注(11)に「もと五百巻である『太平広記』を『四百余巻』としているが、この点について特に言及

した研究は見当たらない。」と指摘されている。

- (11) 『増補文献通考』巻二四二(藝文考)によれば、『太平広記』と同じく北宋の初期に編纂された類書『文苑英華』は高麗宣宗二年(一〇二七年)、『太平御覧』は高麗明宗二十二年(一一九二年)に朝鮮に伝わったという。

- (12) 『成宗實録』巻二六一に、成宗二十三年に『太平広記詳説』を重刊したとの記載が載る。また前掲注9徐張源「△太平広記」東傳之始末及其影響」に「如此刊行之△太平広記詳説」、其後三十年有重刊之記録、其需要之盛可知矣」とある。

- (13) 十五世紀半ばハングルが創製されて以降、様々な本が諺解されるようになった。杜甫の詩を訳した『杜詩諺解』(成宗十二年、一四八一年)は朝鮮ではじめてのハングル翻訳本であった。

- (14) 韓国に現存する『太平広記』の各本については、関寛東氏の各書を参照。『太平記諺解』は全五巻、訳者不明であるが、この書の刊行によって文人のみに限られていた『太平広記』の読者はより一層拡大した。一七世紀には女性同士がハングルに翻訳された中国通俗小説を相互貸借するネットワークができあがっており、当時女性達は中国小説をハングルで読んでいたという(エマニユエル・パストリッチ「十八世紀日本と韓国における中国通俗小説の受容と知識人の反応」中国社会科学学会一九九九年四月例会での口頭発表とその際配布された資料による)。『太平広記諺解』については、現在寛南金一根所蔵の寛南本五巻五冊本と旧李朝王家所蔵の榮善齋本九巻が残っており、両方とも写本である。寛南本については、金一根氏により『太平廣記諺解不分巻』(一九五九年韓國서예通文館漢文據明刊本排印諺文用鈔本景印(國學資料第一輯))として出版されている。しかし前掲注9徐張源「△太平広記」東傳之始末及其影響」によれば、この二本の諺解の原本は『太平広記詳説』と関係のない明代の版本であるので、本稿ではこれ以上ふれない。

- (15) 朝鮮における漢文学と国文学(朝鮮語文学)の関係については、野崎充彦「朝鮮の漢文学―表現と手段の乖離をめぐって―」(『アジア遊学』第12号、勉誠社)、同じく同氏による、韋旭昇著・豊福健二監修・柴田清継・野崎充彦訳「朝鮮における中国文学」(研文出版社・一九九九年)「解説」を参照。野崎氏によれば朝鮮における漢文学と国文学の関係は我々日本人にとつてのそれとは異なり、漢文学とのかかわりの深さはより深く、また逆にいえばその影響力の大ききゆえに朝鮮文人達は常に「表現と手段の乖離をめぐる果てしない苦闘」を行ってきたという。朝鮮文人のなかにはハングルを書けなかった人もいるという事実は、我々にとつての漢文学と国文学の関係と、朝鮮文人にとつてのその関係がかなり異なるものであった一つの例証といえるだろう。

- (16) テキストは朝鮮古書刊行会「大東野乘一」(明治四十二年)所収の『慵齋叢話』を用いた。

(17) 関寛東『中国古典小説在韩国之伝播』、『中国古典小説資料叢考・韓国篇』において、所蔵場所について「成均館」とだけ記述されたものと「成均館（誠庵本）」と記述されたものがあるが、後に記すように誠庵文庫は趙炳舜氏の個人文庫であり、成均館大学とは関係ない。また今回筆者は実際に成均館大学に赴き、同校の尊経閣文庫の書庫を見せていただき、『太平広記詳節』は所蔵されていないことを確認した。

(18) 『韓国古書総合目録』では各書誌情報の書き方に統一がとれていない。こうした韓国における書誌学の問題点については、藤本幸夫「朝鮮書誌学の諸問題」（『朝鮮学報』第百六十三輯）に詳しい。

(19) 一九九七年七月高麗大学大学院国語国文学科提出論文

(20) 金鉉龍『韓中小説説話比較研究』（一志社・一九七六年）にも各巻数ごとの分類、収録話数が記されている。金氏も忠南大目録を参考としているが収録話数が一部李来宗氏の目録と一致しない。

(21) この指摘は前掲注7野崎氏論文による。

(22) 卷二六五識語「余聞蔵書家有宋刻蓋闕七卷云。其三卷余攷之得十之七、已付之梓、其四卷僅十之三。博洽君子其明以語我、庶幾為全書云。（以下略）」

卷二十七識語「此卷宋版原闕。予攷家蔵諸書得十一人補之。其餘闕文尚俟他日。十山談愷志。」

(23) 「試論『太平広記』の版本演変」（『文献』四・一九九四年総記六二期）。他に張国風氏には『太平広記』に関連して、以下の論文がある。

「『太平広記』陳校本的価値」（『中国人民大学報』一九九四年第五期）、「『太平広記』諸本総目録異同」（『北京図書館館刊』一九九四年第一・二期）、「文淵閣四庫本『太平広記』底本考察」（『社会科学戦線』吉林省社会科学院・一九九五年第三期）、「『太平広記』引書浅談」（『文史知識』一九九五年第八期）、「『太平広記』宋本原貌考」（『中華文史論叢』第五十六輯）

また台湾にもいくつかの談刻本が残されている。台湾所蔵の『太平広記』談刻本については、盧錦堂「記所見明談愷刻本太平広記—兼及有關宋本流傳的一些線索」（『中国古典小説研究專集六』聯經出版事業公司・一九八三年所収）に詳しい。

(24) 陳氏校本、孫氏校本、野竹斎抄本においては「侯泳」となっている。

(25) 詳細は、『中華書局本《太平広記》輯補』（『鉄道師範学院（社会科学版）』一九九四年第一期）及び前掲注（23）盧錦堂論文参照。

(26) 方詩銘輯校『冥報記・廣異記』(中華書局・一九九二年)

本稿は平成十三年度文部科学省科学研究費奨励研究(A)の成果の一部である。

『太平広記詳節』目録 (国立中央図書館所蔵本及び高麗大所蔵本)

括弧内の数字は『太平広記』の巻数を表わす。

(国立中央図書館蔵本)

卷十四「虬髯客」(一九三)「末尾二部のみ存」「車中女子」(一九三)「崑崙奴」(一九四)「僧俠」(一九四)「崔慎思」(一九四)「聶隱娘」(一九四)「紅線」(一九五)「義俠」(一九五)「田膨郎」(一九六)「買人妻」(一九六)

卷十五「張華」(一九七)「張説」(一九八)「顧況」(一九八)「戎昱」(一九八)「王建」(一九八)「白居易」(一九八)「元和尚門」(一九八)「王播」(一九九)「劉瑒」(一九九)「鄭畋」(一九九)「高蟾」(一九九)「賀若弼」(二〇〇)「李密」(二〇〇)「高駢」(二〇〇)「獨孤及」(二〇〇)「杜兼」(二〇〇)「潘彦」(二〇〇)「顧況」(二〇二)「衛道弼曹紹夔」(二〇三)「蔡邕」(二〇三)「李謨」(二〇四)「呂鄉筠」(二〇四)「玄宗」(二〇五)「羅黑黑」(二〇五)「李密」より「衛道弼曹紹夔」の七話は、マイクロになし。

卷十六「王僧虔」(二〇七)「唐太宗」(二〇八)「蘭亭序」(二〇八)「袁精」(二一一)「張僧繇」(二一一)「韓幹」(二一一)「眞玄奘」(二一五)「張環藏」(二一六)「王栖巖」(二一七)「鄒生」(二一七)「華佗」(二一八)「腹痕病」(二一八)「廣周」(二一九)「談刻本では「周廣」」「漁人妻」(二二〇)「絳州僧」(二二〇)「刁俊朝」(二二〇)「王布」(二二〇)「駱山人」(二二三)「李淳風」(二二四)「重明枕」(二二七)「韓志和」(二二七)

卷十七「李欽瑤」(二二七)「陟岵寺僧」(二二七)「王積薪」(二三八)「日本王子」(二三八)「漢太上皇」(二二九)「王度」(二三〇)「陳仲躬」(二三一)「破山劍」(二三一)「甘露僧」(二三一)

卷十八「千日酒」(二二三)「崑崙腸」(二二三)「青田酒」(二二三)「李景讓」(二二三)「孫會宗」(二二三)「裴弘泰」(二二三)「劉伶」(二二三)「孫伯翳」(二三五)「王方翼」(二三五)「李舟」(二三五)「吳王夫差」(二三六)「霄遊宮」(二三六)「沙棠舟」(二三六)「王敦」(二三六)「元琛」(二三六)「隋煬帝」(二三六)「許敬宗」(二三六)「韋陟」(二三七)「李使君」(二三七)「郭純」(二三八)「王燧」(二三八)「唐同泰」(二三八)「寧王」(二三八)「劉玄佐」(二三八)「大安寺」(二三八)「李延召」(二三八)「成都丐者」(二三八)「薛氏子」(二三八)「秦中子」(二三八)

卷十九「成敬奇」(二三九)「杜宣猷」(二三九)「閻知微」(二四〇)「薛稷」(二四〇)「趙覆温」(二四〇)「張友」(二四〇)「宗楚客」(二四〇)「張説」(二四〇)「程伯獻」(二四〇)「李林甫」(二四〇)「王承休」(二四一)「途中で闕文」

*『太平広記詳節』忠南大藏目録には「王承休」に続いて以下の七話が卷十九の篇名として記載されているが、国立中央図書館本では失われている。

「益州長史」(二四二)「蕭穎士」(二四二)「郝昂」(二四二)「賈少卿」(二四二)「閻玄」(二四二)「裴明禮」(二四三)「賈父」(二四三)

〔高麗大所蔵本〕

卷八「張佐」(八三)「逆旅客」(八五)「賂賁王」(九一)「玄覽」(九四)「法将」(九四)「鵬鳩和尚」(九六)「靈隱寺」(九九)「李元平」(一一二)「韋丹」(一一八)「崔尉子」(一二二)「陳義郎」(一二二)「華陽李尉」(一二二)「段秀實」(一二二)

卷九「韋判官」(一二三)「李生」(一二五)「慮叔敏」(一二七)「鄭生」(一二七)「尼妙叔」(一二八)「宋陽氏」(一二八)「杜凝妾」(一二九)「賈凝妾」(一二三〇)「嚴武盜妾」(一二三〇)「緑翹」(一二三〇)「張縦」(一二三)

卷十「唐玄宗」(二三六)「叱金像」(二三六)「蜀當婦」(二三六)「萬里橋」(二三六)「唐肅宗」(二三六)「裴度」(二三八)「汪鳳」(二四〇)「蕃中六畜」(無)「耶孤兒」(無)「胡王」(無)「徐慶」(一四三)「母曼」(一四三)「楊慎衿」(一四三)「元載」(一四三)「呂群」(二四四)「崔雍」(二四四)「安守範」(二四五)「尉遲敬德」(二四六)「魏微」(二四六)「裴有敏」(二四七)「張嘉貞」(二四七)「鄭虔」(二四八)「崔圓」(二四八)「術士」(二四九)「王陟」(無)

卷十一「鄭德隣」(二五二)「李公」(二五三)「袁滋」(二五三)「崔潔」(二五六)「李甲」(二五八)「定婚店」(二五九)「武殷」(二五九)「盧生」(二五九)「秀師言記」(二六〇)「李行修」(二六〇)「灌園嬰女」(二六〇)「侯繼図」(二六〇)

卷三十九「後魏莊帝」(四四二)「閩州莫徭」(四四二)「蔣武」(四四二)「蕭志忠」(四四二)「狼塚」(四四二)「王含」(四四二)「昇平入山人」(四四二)「張華」(四四二)「吳興田父」(四四二)「吳唐」(四四三)「嵩山老僧」(四四三)「楊邁」(四四三)「歐陽紇」(四四四)「陳巖」(四四四)「魏元忠」(四四四)「張鑑」(四四五)

卷四十「楊叟」(四四五)「孫恪」(四四五)「能言」(四四六)「焦封」(四四六)「長孫無忌」(四四七)「大安和尚」(四四七)「葉法善」(四四八)「李參軍」(四四八)「徐安」(四五〇)

卷四十一「任氏」(四五二)「王生」(四五三)「裴少尹」(四五三)「計真」(四五三)「張立本」(四五四)「姚坤」(四五四)「張直方」

(四五五)

卷四十二「種黍来蛇」(四五六)「顔回」(四五六)「蜀五丁」(四五六)「章苟」(四五六)「天門山」(四五六)「餘干縣令」(四五六)
「王眞妻」(四五六)「李林甫」(四五七)「宣州江」(四五七)「無畏師」(四五七)「海州獵人」(四五七)「選仙場」(四五八)「姚景」
(四五九)「戸部令史妻」(四六〇)「劉潛女」(四六〇)「楚文王」(四六〇)「鄴郡人」(四六〇)「寶觀寺」(四六〇)「羅州」(四六一)
「范質」(四六一)「飛數」(四六一)「知太歲」(四六一)「條支國」(四六一)「黎景逸」(四六一)「崔圓妻」(四六一)「衛女」(四六一)
「天后」(四六一)「衛鑄」(四六一)「南人捕鴈」(四六一)「雀目夕昏」(四六一)「楊宣」(四六一)「烏君山」(四六一)「新喻男
子」(四六三)「漱金鳥」(四六三)「杜鵑」(四六三)「蚊母鳥」(四六三)「鷺」(四六三)

〔附記〕

今回韓国での調査をするに至った経緯及び調査の経過について簡単に記しておきたい。筆者は一九九六年から九七年にかけて北京へ留学したが、以来『太平広記』の版本及び抄本に関して、ご教示を受けてきた中国人民大学の張国風教授が二〇〇一年三月より一年間韓国漢陽大学で数鞭をとられることになった。張教授が韓国へ行かれる直前に北京でお会いしたところ、この一年間は『太平広記』の研究が十分に行えないのではないかと心配されていた。筆者は台湾の王国良氏の著書『六朝志怪小説考論』に、『太平広記詳節』に関しての記述があることを思い出した。また一九九七年留学中に参加した中国福建省武夷山における学会「97武夷山中国小説研討会」において、韓国慶熙大学閑寛東教授により韓国における中国古典小説の現存状況が報告され、その中で『太平広記詳節』に関する言及もあった。そこで筆者は、張国風教授に『太平広記詳節』について筆者が知っている限りの情報をお伝えした。その後張国風教授は、高麗大学崔容澈教授の協力を得、調査を進められ、多くの成果を得られた。そして筆者に「自身の帰国前に韓国に来て、『太平広記詳節』を見ることを勧めて下さった。そこで筆者は二〇〇一年十二月十六日から二十一日の日程で、初めて韓国へ行くこととなった。それまで筆者は韓国語、韓国文学に対してほとんど知識がなく、また張教授ご自身も韓国における文献調査にとまどつておられる様子を事前にお聞きしていた。とくに誠庵文庫に関しては、全く情報がなかったが、幸いにも東京大学大学院人文社会系研究科朝鮮文化部門の吉田光男教授より誠庵文庫やその他韓国における重要な図書館等について事前に教えていただくことができた。韓国での調査にあたっては、筆者の中国留学当時の同学であった姜必任さん(北京大学博士・現成均館大学講師)や同じく留学当時の同学で張国風教授と同時期に高麗大学に外国人教師として滞在していた劉寧さん(現北京師範大学助教教授)に大変お世話に

なった。また筆者の訪問と同時期に成均館大学に招聘されていた東京大学大学院人文社会系研究科川原秀樹教授にも成均館大学図書館閲覧の便宜をはかっていただくとともに、韓国における中国学について多くのことを教えていただいた。高麗大学においては崔溶澈教授に韓国における中国文学研究の現状についてご教示いただいた。とくに韓国には『太平広記』や中国の通俗小説に影響をうけ、中国語で書かれた「漢文小説」が多く存在すること、従来そうした漢文小説研究は、専ら韓国文学研究者の立場から行われてきたが、今後は中国文学研究の観点からも、韓国において中国文学がどのように受容され、新しい文学を生み出していったのかを考える必要があるということ、すでに台湾を中心に韓国のみならず、ベトナムなども対象として、中国以外の地域で書かれた漢文による小説の研究が行われ、一部の成果が公表されている（中国古典文学研究会編『域外漢文小説論究』台湾学生書局・民国七十八年）ということなどをうかがった。今回の韓国訪問では、『太平広記』の流伝、受容、影響を一つの軸として、日本・韓国などの文学にも研究の視野を広げる必要性があること、またそれが翻って『太平広記』自身の研究にも新たな成果をもたらす可能性が大であることを実感できた。このことは上記に記した調査の成果にも増して筆者にとって大きな収穫であった。

最後に張国風教授には今回の筆者の韓国訪問のきっかけを作っていただいただけでなく、韓国において張教授が調査された情報資料、問題点を詳細に教えていただいたこと、そして筆者が日本の研究者にこうした成果を報告することを快く承諾してくださったことに対して深く感謝申し上げます。張国風教授は二〇〇一年の年末に中国に帰国され、その成果を『文学遺産』二〇〇二年第四期に、「韓国所蔵『太平広記詳節』的文獻価値」として発表されています。

上記に記した以外にも今回の訪問では、高麗大学、成均館大学、国立中央図書館など多くの場所でも多くの方々にお世話になりました。短期間の調査でかつ韓国に対してほとんど知識がなかったにもかかわらず、大きな成果が得られたのは、こうした方々の暖かいご助力によるものです。ここに記して深く感謝の意を表します。